

日時：2012年10月26日(金) 12:40～13:40

会場：第11会場 (グランドプリンスホテル京都 プリンホール2)

〒606-8505 京都市左京区宝ヶ池 Tel: 075-712-1111

a Novartis company

# リフラクティブレーザーとAT IOL

## 進化するTechnologyの Key Point

座長

ピッセン宮島弘子 先生 (東京歯科大学水道橋病院)

眼科領域のレーザーや眼内レンズ(IOL)における目覚ましいTechnologyの進歩により、患者満足度は確実に向上しています。屈折矯正手術に使用されるリフラクティブレーザーやAdvanced Technology (AT) IOLがその代表的なものです。本セミナーでは、3月に本邦で承認を受けたばかりのWaveLight® FS200フェムトセカンドレーザー、AT IOLとして世界で幅広く使用されているトーリックレンズ(AcrySof® IQ TORIC)および多焦点レンズ(AcrySof® IQ ReSTOR®+3D)について、3名の演者にご講演いただきます。

最初に松本玲先生に、新しいフェムトセカンドレーザーの特徴と実際に使用した臨床成績についてお話しいたします。Laser in situ keratomileusis (LASIK)における角膜フラップ作製において、正確性と安全性を高める独自の機能、そして、実際に作製されたフラップの再現性についてご講演いただきます。

AT IOLとして日本で急速に普及しているAcrySof® IQ TORICによって、実際に使用した多くの先生方が白内障手術と同時に角膜乱視を矯正でき、結果としてより良好な視力が得られることを経験していらっしゃいます。発売してから既に3年が経過しましたが、現在白内障手術例の30%近くに挿入し、経時的に長期にわたって経過観察なさっている西村知久先生に、その成績についてご講演いただきます。

最後に、もう1つのAT IOLであるAcrySof® IQ ReSTOR®+3Dについて、佐々木洋先生にご講演いただきます。従来の+4D近方加入と比較して加入度数を減らすことで、中間視力の向上と明視域の拡大が期待されます。実際の患者満足度向上効果について、そして術前の水晶体混濁分類から術後結果を予測するという新しい知見についてもお話がきけると思います。

3名の先生方から進化するTechnologyの実際と使用方法のキーポイントをおききすることで、現在よりさらに患者満足度を上げる方法が必ずみつかることと思います。



演者 / 演題

松本玲 先生 (レイ眼科クリニック)

『屈折矯正におけるWaveLight® FS200  
フェムトセカンドレーザーの有用性』

西村知久 先生 (美川眼科医院)

『再考!乱視矯正の重要性とその効果!』

佐々木洋 先生 (金沢医科大学)

『AcrySof® IQ ReSTOR®+3Dがもたらす高い患者満足度  
～中間視力の向上とその効果～』

セミナー整理券

開催当日の7時30分より11時30分まで国立京都国際会館1階メインロビーにて整理券を配布いたします。(お1人様1枚限り) 定員となり次第、配布を終了いたしますので予めご了承ください。また整理券はセミナー開始10分後に無効となります。

共催：第66回 日本臨床眼科学会・日本アルコン株式会社

日本アルコンはMedical Missions ProgramやAlcon Japan Hida Memorial Awardを通じて眼科医療の発展をサポートしています。





**ビッセン宮島弘子 先生**  
(東京歯科大学水道橋病院)

## 【ご略歴】

1981年 慶應義塾大学医学部卒業  
慶應義塾大学医学部眼科学教室入局  
1984年 ドイツ ボン大学眼科助手  
1987年 慶應義塾大学医学部眼科学教室助手  
1989年 国立埼玉病院眼科医長  
1992年 ドイツ ボン大学医学博士取得  
1993年 慶應義塾大学医学博士取得  
1995年 東京歯科大学市川総合病院眼科講師  
慶應義塾大学医学部眼科学教室非常勤講師  
2000年 東京歯科大学水道橋病院眼科助教授  
2003年 東京歯科大学水道橋病院眼科教授

## 演者 / 演題



**松本玲 先生**  
(レイ眼科クリニック)

**『屈折矯正におけるWaveLight® FS200  
フェムトセカンドレーザーの有用性』**

## 【ご略歴】

1990年 宮崎医科大学卒業、京都大学医学部眼科学教室入局  
神戸逓信病院眼科、県立塚口病院眼科、  
遠谷眼科、遠谷OSLアイクリニック勤務  
2007年 医療法人社団医新会に赴任  
2008年 レイ眼科クリニック院長

屈折矯正手術が本格的に本邦で行われるようになってから10年以上、それはレーザーテクノロジーの進歩とともに変遷してきたと言っても過言ではありません。医療器具として1998年にエキシマレーザーが厚労省の認可を得て、その後2000年PRK、2006年近視レーシックが承認されました。2010年にはフェムトセカンドレーザーが承認され、薄く均一な厚さのフラップ作成が容易となり、角膜の薄い人にも手術適応が広がりました。

本年3月新たに承認された新しいフェムトセカンドレーザーWaveLight® FS200の使用経験を紹介し、レーザー屈折矯正手術の有用性を考えてみたいと思います。また屈折矯正手術において、術後の裸視視力の向上は患者満足度に直結しますが、角膜周辺部に照射されるレーザーのエネルギロースを補正し、術後の球面収差を抑える照射法についても紹介したいと思います。



**西村知久 先生**  
(美川眼科医院)

**『再考！乱視矯正の重要性とその効果！』**

## 【ご略歴】

1992年 佐賀医科大学(現佐賀大学)卒業、佐賀医科大学眼科医員  
1993年 日赤和歌山医療センター眼科医員  
1998年 佐賀医科大学大学院修了、佐賀医科大学眼科助手  
1999年 社会保険大牟田天領病院眼科医長  
2001年 佐賀医科大学眼科講師  
2002年 佐賀県立病院好生館眼科部長、佐賀大学医学部臨床助教授  
2007年 佐賀大学医学部臨床准教授  
2008年 美川眼科医院副院長  
2011年 医療法人YT美川眼科医院副理事長

白内障手術はその歴史が始まって以来、主に患者さんの視機能を回復することが目的でした。もちろんそれは今も変わりませんが、2009年から日本で発売されたトーリックIOLの登場により、角膜乱視を矯正することで、白内障患者さんにより良い術後裸視視力を提供することが出来るようになりました。当院でもトーリックIOLをすぐに導入し、いまでは白内障手術症例のうち約30%に使用するに至っており、患者満足度を向上させるための大変重要な

ツールとして重宝しています。

現在我々の施設では、多施設共同研究に参加しており、トーリックIOLの術後長期観察による臨床効果を検証中です。患者さんの視機能はもとより、実際の乱視矯正効果、そしてトーリックIOLの眼内での安定性などを調査しております。今回はその臨床研究の中間報告を発表させていただきたいと思います。乱視矯正の重要性とその効果を再考してみましょ。



**佐々木洋 先生**  
(金沢医科大学)

**『AcrySof® IQ ReSTOR® +3Dがもたらす  
高い患者満足度 ~中間視力の向上とその効果~』**

## 【ご略歴】

1987年4月~1991年7月 自治医科大学レジデント「眼科学」  
1991年8月~1993年8月 米国オークランド大学留学(リサーチフェロー)  
1993年8月~1993年9月 自治医科大学医員「眼科学」  
1993年10月~1996年2月 自治医科大学助手「眼科学」  
1996年3月~2005年4月 金沢医科大学講師「眼科学」  
2005年5月 金沢医科大学医学部教授「感覚機能病態学(眼科学)」  
2007年4月 中国医科大学眼科客員教授(兼任)  
研究分野:白内障の臨床、疫学、基礎研究。紫外線と眼障害。  
眼光学。電磁波と眼障害。眼薬理。

AcrySof® IQ ReSTOR +3Dはその名の通り近方用として眼内レンズ面で+3.0D加入されているため、眼鏡面換算値では約-2.5Dのところ付近の焦点が合うように設計されています。つまり正視の場合、無限遠と約40cmの位置に焦点が合うようになっているのですが、これにより患者さんは遠方、近方はもとより、中間距離においても良好な視力を得ることが出来ます。従来までの多焦点IOLでは中間視力の落ち込みが課題であり、この不自然な見え方に対し不満を訴える患者さんが決して少なくありませんでした。現在、私どもの施設では主にAcrySof® IQ ReSTOR +3Dを使用していますが、多くの患者さんから大変良好な術後満足度を得られていると実感しています。そこで今回は、AcrySof® IQ ReSTOR® +3Dによって得られる良好な中間視力

による明視域拡大効果をお示しし、どの程度患者満足度を向上させることが出来るのかをご紹介したいと思います。

また、多焦点IOLの症例でより高い患者満足度を得るためには、術前に白内障の状態を的確に把握しておくことが肝要です。私どもが実践している水晶体分類からの多焦点IOL適応患者の選択法についてもご紹介したいと思います。

そして最後に、少し話題は変わりますが、近年注目を集めているSub-surface nano glistenings現象と視機能の関係について、私どもの施設で検討した結果をお示ししたいと思います。